重版御礼

『アラベスク後宮の和国姫』
特別ストーリー
スルタンと 寵姫と 和の国グルメ

忍丸・著

私がダリル帝国にやってきてから数ヶ月経った。

一時はどうなることかと思ったけど、意外にも上手くやっていけている。

運の要素も多分にあっただろうが、なにより素晴らしい出会いがあったからだ。

私の目の前で寝そべっている男も、そのうちのひとりである。

「まだ、拗ねているんですか？」

笑いを堪えながら声をかければ、その人は胡乱な瞳を私に向けた。

「うるさい。今日の敗因を頭の中で振り返っているところだ。邪魔をするな」

「全戦全敗でしたもんねえ」

(C)Shinobumaru 2023
©KADOKAWA CORPORATION 2023
禁無断転載

「お前が強すぎるんだよ……」

　クッションに顔を埋めて悶えているのは、ダリル帝国皇帝アスィールだった。

「相撲は深いんですよ。一朝一夕じゃ上手くなりません」

　クスクス笑っていると、アスィールはどこまでも不満そうだ。

「いつか必ず勝つからな」
「あらあら。本気ですか？」
「俺は負けず嫌いなんだ」

　――そう。今日も今日とて私たちは相撲に興じていた。
　いつもの如く寝室に呼び出されたので、日頃の運動不足を解消しようと思い切り体をぶつけ合ったのだ。
　寵姫と皇帝がふたりきり。そして密室、弾む息、飛び散る汗、触れ合う肌――

(C)Shinobumaru 2023
©KADOKAWA CORPORATION 2023
禁無断転載

だのに、色っぽい雰囲気なんて欠片もない。なにせやったのは相撲である。

冷静に考えて〝なにしてんだ〟と思わなくもないが、いまの気分は爽快だ。

相撲は楽しい。

日々ため込んだ鬱憤を晴らすにはぴったりで、ついつい熱中してしまった。

「いつもお付き合い頂いてありがとうございます。アスィール様」

笑いながら声をかけると、アスィールは軽く睨みつけてきた。
長い腕を伸ばして私の髪に触れる。
指の腹で手触りを確かめていたかと思うと、ふいに目もとを緩めた。

「……いつか絶対に負かす。俺が惚れる価値がある人間だと認めさせてやるからな」

とろりと翡翠の瞳が柔らかく溶ける。
熱のこもった声が鼓膜に心地よく響いて、じんわりと頬が熱くなったのがわかった。

「そ、そんな話もありましたね～……」

そろそろと視線を外す。

(C)Shinobumaru 2023
©KADOKAWA CORPORATION 2023
禁無断転載

――酔った勢いでした約束なのに。

こんな雰囲気で持ち出されると恥ずかしくて仕方がない。

――ええい。なんで赤くなっているのよ。私はいつか故郷に帰るんだから。

現実を思い出せば、にじんだ熱もあっという間に冷めていく。
アスィールの手中から自分の髪を抜き取った私は、慌てて話題の転換を図った。

「そうだ。この前、和食に興味があると言っていたでしょう」
「うん？　ああ、そんな話をしたな」
「作ってみたんですが、よかったら食べませんか」
「……おお！　いいな。楽しそうだ」

翡翠色の瞳が輝き出す。
いそいそと近寄ってきた彼に、私は持参した袋の中を探りながら続けた。

「今回用意したのは、大豆を加工したもので、精進料理の一種です。旅の法師に教わったのですが、これが美味しくって。材料も身近なもので済みますし、一時は毎食のように食卓に上がっていました」

(C)Shinobumaru 2023
©KADOKAWA CORPORATION 2023
禁無断転載

「ほほう。大豆か。お前の国では大豆をよく食するのか？」

「ええ。大豆を利用した調味料は食卓にかかせません。それだけじゃなく、ここと違って頻繁に肉を食べるわけではありませんから、体を大きくするのに大豆を摂るんです」

「面白い。どんな料理がある？」

「ええとですね……」

つらつらと説明をしていくと、大豆料理の多彩さにアスィールは驚いたようだった。

ダリル帝国でも様々な豆類を食する。
とはいえ、和の国の一種類だけを徹底的に利用する姿勢には感心したようで、

「我が国の豆類も、未知の利用法があるかもしれんな」
と思案げだった。

「豆は保存が利く。つまり、万が一の蓄えに向いているということだ。その上、多彩な調理法が確立されていれば、たとえどんな危機に陥ろうとも、民の心を和らげるに違い

(C)Shinobumaru 2023
©KADOKAWA CORPORATION 2023
禁無断転載

ない。辛い時だって、美味い飯があれば、それだけで救われるものだ。そうだろう？」

「そうですね」

かつて父からもらった言葉に似た発言に、自然と頬がゆるむ。

アスィールはいつだって民を忘れない。

貪欲に情報を得ようとする姿勢は尊敬に値するし、好ましいと思った。

「それで、どんなものを作ってきたんだ？」

「こちらです」

「……。藁？」

「はい。藁の中に包んで作るんですよ」

現れた大豆を目にして、アスィールの顔が引きつった。

(C)Shinobumaru 2023
©KADOKAWA CORPORATION 2023
禁無断転載

「……腐ってるように見えるが」
「間違いなく腐ってますよ」

銀の匙で中身をすくう。つうっと真っ白い糸が何本も伸びた。

「納豆です」

アスィールの顔から血の気が引いた。
彼は私の両肩を掴むと、どこか切羽詰まった様子で言った。

「……正気か？」
「正気ですけど？」
「腹を壊すだろうが！」
「壊しませんけど!?」

――ええええ。なんなの？

よくわからない状況に困惑していると、眉間に皺を寄せていたアスィールが天啓でも受けたかのように晴れやかな表情になった。

(C)Shinobumaru 2023
©KADOKAWA CORPORATION 2023
禁無断転載

「わかったぞ。精進料理……だったか。それは、選ばれた勇者のみが食せるのだろう!?」

「なに言ってるんですか。毎食のように食べてたって言ったでしょう!?　私が勇者だとでも!?　勇ましい戦士に見えますか、この私が!?」

「少なくともスモウは強いよな」

「……ぐっ！　否定はしませんが」

「ナットウを食べたおかげだな。さすがはライラーだ」

思わず言葉を詰まらせる。

――自国の料理を出しただけなのに、なんでこんな……。

そもそも、ダリル帝国だって似たようなものだ。

各家庭で作られるヨウルトは動物の乳を発酵させた食品だ。

納豆もヨウルトも腐らせて作る。違いと言えば、豆か乳かだけ。

むしろ、穀物である納豆の方が、私からすれば忌避感が少ないのだけれど……。

――なんだか腹が立つわ。

(C)Shinobumaru 2023
©KADOKAWA CORPORATION 2023
禁無断転載

和食を食べたいというから、手に入る材料の中で工夫したというのに。

こんな扱いはひどいと思う。故郷を馬鹿にされた気分だ。

――そうだ。

にんまりと笑う。最高の嫌がらせを思いついたからだ。

「アスィール様は、いつか私に相撲で勝ちたいんですよね？」

笑顔でアスィールを見つめる。

なにやら異変を察したらしい彼は、わずかに身を硬くした。

「あ、ああ。負けっぱなしは男としての矜持が……」

「なら、納豆を食べるべきでは？」

「は？」

「だってこれは、勇者の食べものなんですもの！」

満面の笑みを浮かべて、銀の匙を差し出す。

更に顔色を悪くしたアスィールに向けて、私は必殺のひと言を投げかけた。

(C)Shinobumaru 2023
©KADOKAWA CORPORATION 2023
禁無断転載

重版御礼
SS
最終ページ

「幾千万の民を預かるスルタンですものね。これくらいはなんてことないでしょう？」

するりとアスィールの手を撫でる。
彼の耳もとに顔を寄せると、更に追い打ちをかけた。

「――ね、私に勝つんでしょ？　このままでいいの」
「……ッ！」

ほんのり頬を染めたアスィールの喉もとがこくりと上下する。
彼はわずかに視線を泳がせると、

「ハハッ。……誰にものを言っている。受けて立とう」

生来の負けず嫌いを発揮して、果敢にも納豆に挑んだのだった。
結果は――まあ、想像のとおり。
ひとくち食べた途端、アスィールは厠に閉じ籠もってしばらく戻って来なかった。

――なんでよ。美味しいのになあ。納豆。

やっぱりここは異国なのだなあと、残った納豆を食べながらしみじみ実感したのだった。

(C)Shinobumaru 2023
©KADOKAWA CORPORATION 2023
禁無断転載